北原白秋
トリップ・トリップ・旅

心は安く、気はかろし、
揺れ揺れ、帆綱よ、
空高く・・・・・・
いい旅だなと、私は思ふ。
『フレップ・トリップ』より

樺太の海豹島にて

台湾にて

落葉松の詩碑
（信州星野温泉）

樺太紀行文の表題になっているフレップは赤い実，トリップは黒い実で、ツンドラ地帯の木の実だと言われます。ここでは**トリップ**＝ trip（旅）と重ねて展示の名称とし、秋の行楽シーズンに合わせて展示することにしました。白秋はどんな経緯で旅をし、どんな作品を残しているのでしょうか。

Ⅰ　南紀・京阪紀行と「五足の靴」

白秋の旅は、21 歳のとき、新詩社のメンバーとの伊勢、大和、和泉、紀伊（熊野）、摂津、山城等にはじまります。

翌年は、新詩社の５名で平戸、長崎、島原、天草などのキリシタン遺跡に立ち寄りました。「５足の靴」は、東京二六新聞の連載の紀行文です。

Ⅱ　小笠原の暮らし

大正３年、妻（俊子）の結核療養のため、小笠原父島に渡ります。ここでは、南国独特の動植物に出会います。南の楽園での暮らしぶりに迫ります。

Ⅲ　憧憬の信州・信濃へ

大正１０年知人主催の講習会出講のため軽井沢へ、１２年に上田市を訪れました。信州の風土にふれ、多くの詩作や短歌が生まれました。

新潟の子どもたちとの出会いで生まれたのが、「砂山」でした。（右写真：北向観音歌碑）

Ⅳ　北の国へ（樺太・北海道）

招聘を受けて、大正１４年、吉植庄亮と樺太、北海道を旅し、『海豹と雲』の詩稿を得ました。赤い鳥にも北国の珍しい風土や生き物が描かれています。家族に宛てた旅の途中の手紙もあります。

Ⅴ　外国へ（朝鮮・満州・台湾）

昭和５年満鉄招聘による満蒙への旅、９年には台湾へ、そして翌１０年には朝鮮へと旅が続きました。

Ⅵ　帰らなむ　故郷

昭和３年旅客機ドルニエ・メルクール機で大刀洗飛行場から大阪への「芸術飛行」をします。それに先だって空から柳川を訪問し、大歓迎を受けます。

白秋は、柳川を出てから生涯４回しか帰柳していません。昭和１６年海道東征の受賞を機に、多磨全九州大会が柳川で行われ、これが最後の郷土訪問になりました。

平成24年　**9月7日（金）～12月29日（金）**

開館時間　９：００～１７：００
入館料　４００円（大人）
（３０名以上団体割引あり）

北原白秋生家・記念館
柳川市沖端町５５－１
TEL（０９４４）７３－８９４０